

〔新出資料〕 三島由紀夫筆「川路柳虹先生の思ひ出」

村上 隆彦

ここに掲載された三島由紀夫の原稿が、長い間未発表のまま、私の手許にあつたいきさつについて書付けておきたい。

詩人西條八十氏は、昭和二十七年（一九五二年）十月から昭和三十三年（一九五八年）九月に至る間、全九輯の季刊詩誌「ポエトロア」を発刊した。瀟洒な、そして頁数も多い立派な詩誌で、各号ごとに例えば「イタリア現代詩特集輯」というような特集を組み、わが国のみならず世界の近現代詩の動向を紹介した。当時の日本の代表的詩人、三好達治、金子光晴、堀口大学、室生犀星、吉田一穂らの作品を載せる一方、新人の作品も、それが優れていると判断されれば、積極的に掲載することもした。西條氏自身は、毎号「アルチュール・ランボオとイリュミナシオン」を掲載し、それは後に大冊『アルチュール・ランボオ研究』となつて中央公論社から刊行された。たしか金子光晴の傑作の一つ「赤身の詩」（詩集『非情』所収）の初出は、この

『ポエトロア』だったと思う。後年、「ポエトロア」の編集をしていた西條氏の息女三井ふたばこ（西條嫩子）さんに会った時、「ポエトロア」に寄稿した詩人たちの原稿はその後どうなったか、訊ねてみたことがあつた。「中村書店（当時渋谷の宮益坂で詩書専門の古書店を開いていた）にあげると非常に喜びましたが、多くは焼却してしまいました」という返事をきいて、私は「赤身の詩」の原稿を思い、非常に惜しいことに思ったが、その一方で、そうした無頓着さにいたく感心したりもした。話が前後するが、そういう三井さんの無頓着さを警戒して、三島氏のこの原稿を私があずかったということもある。

この「ポエトロア」終刊後しばらくして、たしか昭和四十一年の頃であつたと思う。新しい詩誌を創刊したいが、編集を手伝わないかという西條氏の意向が私に伝えられた。私はかたじけなく思いながらも、即座に辞退した。私には編集の能力がないからである。その旨のことを丁寧に連絡

すると、それでは編集のプランだけでもいいから考えてみてくれぬか、という要望が改めて伝えられた。そこで、私は編集について立案し、その一部として小説家による詩人評というものを提案し、どの小説家にはどの詩人を、という具体的な案も伝えた。

その際に、まづ先に考えたのは、三島由紀夫氏に詩人伊東静雄について書いてもらおうということであった。その頃、私は三島氏の作品を耽読していて、何かのエッセイで同じ日本浪漫派に属したことのある伊東静雄について書いているのを、読んだ記憶があったからである。

この案に基づいて、三島氏のところへは親交のある三井さんが依頼に出むいた。そして三島の快諾を得た。その折、三島氏は自著『午後の曳航』を署名の上くださった。間もなく、一週間とたたぬうちに原稿を郵送してくれた。それがここに掲載した原稿である。対象の詩人は川路柳虹になっていた。

せつかく原稿をいただいたものの、いたずらに歳月が過ぎ、その間に西條氏は入退院を繰り返して、やがて昭和四十五年（一九七〇年）八月に、喉頭ガンのため亡くなった。同じ年の十一月には三島氏自身も亡くなってしまった。原稿だけが私の手元に残る仕儀となった。

三島氏が書いている川路柳虹は、周知のように、明治の

元勳川路聖謨の曾孫にあたる人で、河井醉茗門下の詩人である。明治三十九年（一九〇九年）九月号の「詩人」にわが国最初の口語自由詩「塵塚」を発表し、翌四十年に同じ「詩人」誌上に「言文一致の詩」を書いた服部嘉香らと共に、わが国口語詩運動の先達である。

隣の家の穀倉の裏手に／臭い塵溜が蒸されたにほひ、／塵溜のうちはこもる／いろいろの芥の臭み、／梅雨晴れの夕をながれ漂って／空はかつかと爛れてる。／塵溜の中には動く稲の虫、浮蛾の卵、／また土を食む蚯蚓らが頭を擡げ／徳利壘の腐片や紙の切れはしが腐れ蒸されて／小さい蚊は喚きながら飛んでゆく。／そこにも絶えぬ苦しみの世界があつて／呻くもの死するもの、秒刻に／かぎりも知れぬ生命の苦悶を現じ、／闘つてゆく悲哀がさもあるらしく、／をりをりは悪息にまじる虫蠅の／種々のをたけび、泣声もきかれる。／その泣声はどこまでも強い力で／重い空気を顛はして、また軋て、／暗くなる夕の底に消え沈む。／惨しい「運命」はただ悲しく／いく夜もここにきて手辛く襲ふ。／塵溜の重い悲しみを許えて／蚊は群がってまた鳴く。

これが「塵塚」の全篇である。ここにはすでにボードレ

ールの摂取がみられる。ランボオの詩を読むように言われたという、三島氏の伝える川路柳虹の発言の意図が理解できるように思う。

ついでのこととして書けば、口語詩運動の推進者服部嘉香先生に、私は学生の時卒業論文「金子光晴論」の指導を受けた。当時、川崎洋、茨木のり子、谷川俊太郎らの詩誌「樫」の同人として、詩壇にも認められていた友人舟岡遊治郎（後に左翼に走って詩を書かなくなった）と二人で指導を受けた。その折、服部先生は金子光晴から貴重な詩関係のスクラップブックを四、五冊借りてきて下さって、自由に読むようにすすめてくれた。以下に、金子光晴について余り知られていないことを書き記す。

そこには、詩集『鯨』収録の代表作をはじめ多くの作品を自筆で（万年筆で）丹念に訂正してあるものが数多くあった。私はそのことに非常に興味をもったが、それ以上に興をそそられたのは、スクラップブックの袋とじの中から、珍しい品々が沢山出てきたことであつた。うっかり忘れていて、そのまま貸してくれたのだろう。時事通信社の「海外特派員を命ず」という毛筆の辞令も出てきた。第二回目の世界放浪の時は、金子は日本から全く絶縁していたと言われていたので、これは面白い発見だった。金子夫人森三千代の若い頃の美しい写真もあつたし、それから、金子が

しばしば詩中で歌っている女性の「陰毛」も丁寧に包んだ紙の中から数多く出てきた。もつとも、それが女性のものかどうかは私には分らなかつたが、これぞ詩に歌われたかの「陰毛」であつたか、と私は感嘆しそつともとにもどした。その金子光晴が昭和三十年（一九五五年）に詩集『非情』を出したとき、川路柳虹は長文の「跋」をそこに寄せている。

三島氏の文章中には丸山薫や田中冬二の名が出てくる。晩年の田中冬二は詩集『サングラスの蕪村』の中で次のように書いている。

前略 思ひかけぬ処で 少年時代敬愛の詩人にお目にかかることができましたのは 大きな欣びでございました 此度は御約束をお守り下さって「葡萄の女」を賜はり厚く御礼を申し上げます「北緯四十三度線下の髭剃あと」などに田中さんのモダンで冷たく鋭い御詩の渝らぬことを嬉しく存じ上げました。

これは三島由紀夫さんから、その逝去三年程前にいただいたもので、私にとって今唯一の形見である。

三島氏が自刃した際に、当時の首相佐藤栄作氏は、気が

狂ったとは思えない、という意味の発言をしたということが、新聞に報じられた。それは本心を語っているのではあるまい、と私は思った。この原稿の中にも出てくる三島氏の母堂と佐藤夫人とは親しい友人同士であった。立場上そう言ったのだろう。三島氏の自刃後間もなく、三島氏のこの原稿の取り扱い方の問題もあって、三井さんに会った。その時彼女は三島氏のことについて「おバカさんねえ」と言った。この言葉は私の心にしみた。三島氏に対する慈しみと哀惜の思いと、深い理解とがそこにはにじみ出ているように思った。その後多くの三島評を読んだが、これほどの言葉をきいたことはない。

三島氏は『天人五衰』の中で、主人公の透に次のように語らせている。

……永久に船の出現しない海、決して存在に犯されぬ海といふものがある筈だ。見て見て見抜く明晰さの極限に、何も現はれないことの確実な領域、そこはまた確実に濃藍で、物象も認識もともどもに、酢酸さくさんにひたさ涵れた酸化鉛のように溶解して、もはや見ることが認識の足枷を脱して、それ自体で透明になる領域がきつとある筈だ。

また結末部で、本多を通して次のようにも書いている。

そのほかには何一つ音もなく、寂寥じやくりやうを極めてゐる。この庭には何も無い。記憶もなければ何も無いところへ、自分は来てしまったと本多は思った。

庭は夏の日ざかりの日を浴びてしんとしてゐる。……

「見て見て見抜く明晰さの極限に、何も現はれないことの確実な領域」を、三島氏は見てしまったのだろう。そうした「領域」を見た詩人は、近代以降の日本の詩人の中にはほとんどいなかった。三島氏が「詩らしいものも一切書かなくなった」といっていることが、理解できるように思う。

(一九九八・九・一)

川路柳虹先生の思い出

三島由紀夫

十四、五才のころ、私は何をまぢがへたか、

詩人のつりりになつて、毎日／オト・ブツク

を即興の詩で埋めておた。そのころあつた

現代詩集とソ・インリーズを耽讀したり、限定

版の詩集を集めたりしておた。

そのうちに双葉文庫に加ふつてくるのが当分まで

たまたま父の友人に~~あ~~退後文学青年らし
 き人かゝる。その人の紹介で、川路柳虹先生
 を訪ねすることになった。一人でゆく勇氣は
 ちろんないから、少年は母に連れられて
 〆〆ふゝとにして、好は秋の駅の近くじ土蔵
 の下~~あ~~目杵を買った。小さな箱に、~~あ~~
~~あ~~雪玉の少女の霜焼けの頬のやうな色
 目杵をかきつしり並んでゐた。
 私たちは教へられた地図を辿つて、下~~あ~~
 の先~~あ~~りお宅に辿りついた。それは小路の奥

20x20

OKINA

の
緑
に
か
こ
ま
れ
た
小
じ
ん
ま
り
し
た
木
造
の
洋

へん び
で
ト
ア
い
と
た
く
ル
て
あ
ろ
の
か
い
か

詩人佐佐木

高
美
モ
入
る
と
ず
ぐ
美
光
に
古
雑
言
か
山
ほ

と
き
ま
し
て
を
り

私
は
あ
ら
ず
は
じ
め
て
象
の

墓場ではないか、活字の墓場のありさまを目

つあににしこ
自
分の将来と
ふふののむ

つかしさを感
じた。

通
こ
わ
た
こ
さ
な
ん
だ
か
の
と
は
美
し
い
花
だ

254
へ
ひ
う
か
く
こ
の
た
部
屋
の
中
ま
ご
若
さ
十

の句ひかたちこめえのるやうだつた。もし
 て母と二人で先あを待つあひだ。そのは
 のの十か十五かであつたらうか。少年の
 脳はただ期待と不安の動悸を打ちつづけ
 るた。
 やかて先あがたしか和服であつたかと思
 はれるが小柄な親しみやすいお女を現はさ
 した。眼鏡の感じ。お鼻の感じに。フランス
 の中年の小柄な銀髪な美しいな雰囲気があつ
 て戦争中の日本で夫はこれについたハイクラ

20X20

OKINA

の幻影を 3んだんに身につけをさした。

少年はその先父の温容を見て安心した。

私は困憊にひつかかるやうな声で 月かの

詩の来正を申し上げ 先父に見こいたときた

いとおねかひし 母もえばかり頭を下げた。

先父は 心安く承諾され やかて傍りの本棚

かうう／＼ボオの詩集をとつて 私に示された。

フアンズ語は讀めません！

と私は 猛犬に襲はれたやうに 金切声で

叫んだ。

カッカリされたとどあらうと思ふ。
 それで先きは一つ一つの詩に懇切に朱を
 入れて下さつたり。~~や~~二重丸あるひは三
 角をつけ、~~短評の書き~~添へて下さるの如常
 だつた。採擇のきびしさと大切さが、いつの
 短評の中に染り込ませてゐたか、思ひ上つた
 少年の私が、そこに含まれてゐる教訓にと
 りほど感服したかと思はれる。
 その時、私をあまうるさく、~~四~~五子に言
 へ出したいと、~~ね~~ねだるのど、先きは秋原組た

20x20

OKINA

氏に紹介状を書き下さつて氏の自宅を
 訪問したこともあつたか。つひに私の詩人に
 たらうといふ跡心はモ／になつたか。
 先生のとこまで。今息の川路明君に紹介さ
 した。同じく早熟なうづり年と交際するうちに
 私は彼のケル１７の面白いゾアがボントた
 ちとも附合ふやうになり。現在我れ社党の麻生
 良方氏（詩集『青春薔薇』の著者）とも知り合
 つて。ニギビさかりの鼻もちならぬ。ニイ
 チエ氣取りの私の文芸青年時代がはじまつた。

それと共に、私は自分の單なる思春期の病に
他ならぬ、~~な~~かつた詩人にならうと、ソノ夢
のケロリと忘れしまひ、詩らしきものの一
切書かなくなつた。

今は、川路先生の偉大と共に、そんな思春
期の少年のオマケゴトに、誠実に附合つて下
さつた先生の心のやさしさが、あらびない思
ひおとなうて、私の記憶に刻印されてゐるの
である。